

下野新聞

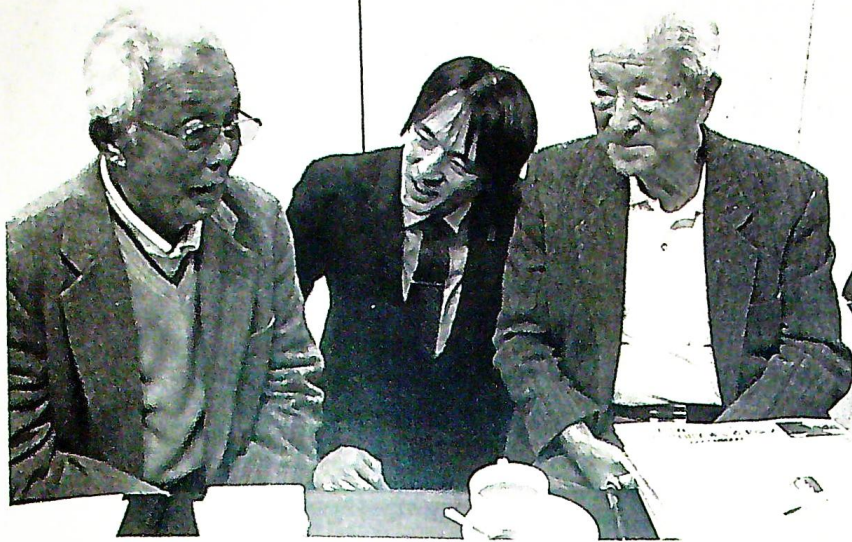
しもつけ

発行所 宇都宮市昭和1丁目8番11号
〒320-8686
下野新聞社
電話 028-625-1111
郵便振替口座 00180-1-623433
○下野新聞社2015

世代超え、記憶伝える

とちぎ 戦後70年

つなぐ



戦友会の有志会で代表を務める篠原直人さん(中央)と氏木武さん(左)ら元軍人。戦争体験者が減る中、証言をしかに聞く機会は貴重だ。11月下旬、東京都千代田区、偕行社

消えかけた戦友たちのつながりを、戦争を知らない世代がつかないでいる。

東京・靖国神社近くのビルにある小さな会議室。11月下旬、約20人の老若男女が集まった。仙台市を拠点とした陸軍第2師団戦友会の有志会の会員たち。司会を務めるのは宇都宮市西川田町、イラストレーター篠原直人さん(32)だ。

戦時を生きた人々の「孫の世代」でありながら、2年前に有志会の代表(会長)を引き受けた。会

ももとは元将兵のみの純粋な戦友会だった。年月とともに会員は減り、8年ほど前に解散を決めた。だが、氏木さんら会員が伝えたいことはたくさんあった。ガダルカナル島や中国、ビルマ(現ミヤンマー)国境近くでの過酷な戦い、今も現地に眠る遺骨、戦後の繁栄は戦友の犠牲の上にあること…。

「生きていく限り、平和の大切さを伝えたい」。熟慮の末、氏木さんらは世代や職業を問わない「サロン」のような有志会として会を続けることを決めた。遺族や大学教員、僧侶、

戦友会継ぐ代表は30代

新聞記者…。人づてに戦後世代が集まった。その中にいたのが、篠原さんだった。飛行機、戦闘機好きが高じて、郷土宇都宮の部隊が玉砕したパラオ戦など戦史を調査するようになり、有志会にたどりついた。

最初から強い「志」があったわけではない。ただ、戦場を生き抜いた会員から感じる「記憶を伝えようとする使命感のよくなもの」を無駄にしたくなかった。

篠原さんら戦後世代3人が会運営の事務一切を引き受けた。本来の「戦友」は氏木さんら5人だけになったが、会員は30〜90歳代の約50人に膨れ上がった。

戦友たちは月1回の会合に足を運び、記憶を語り伝える。その証言に耳を傾けることで、戦後世代は戦争を事実として実感できる。篠原さんにとって、有志会は「体験者」と価値観を共有する大切な場所だ。

戦争を体験した人々の多くが今、「伝えること」の難しさを口にする。本県でも解散した戦友会がある。

いかに体験を、思いを継承していくか。「戦争の教訓をつなぐモデルケースになれば」幅広い世代が関わる有志会の形が他の戦友会にも広がることを、篠原さんは願っている。

「戦後70年」の年が、間もなく幕を閉じる。県内の戦争体験者を訪ね歩いた取材班は、時の経過を肌で感じた。体験者は減り、戦後生まれが日本の人口の8割を超える。

世界ではテロや紛争、内戦が後を絶たない。あの戦争の教訓をどう次代に伝えていくか。平和を願う人たちと共に、もう一度「戦後70年」を考える。